

源氏物語爪印 末摘花巻

村 井 利 彦

- 【1】「思へどもなほ飽かざりし夕顔」(245)。「け近くうちとけたりしあはれ」なる夕顔。手馴れて、つくろげる女。夕顔の夢よもう一度、という書き出しである。その夢が無残に破れる巻。そして、光源氏の目を若紫の少女に向ける巻、というのが、どうやらこの巻のテーマであるようである。
- 【2】「年月経れど」(245)とあるから、夕顔事件から数年経過しているように、この段階では思われる。が、そう年月がたっていないことは、間もなく判明する。「年月」は「経れど」の飾り、実質的意味はない。強いて言えば、正月を越しているから「年」といったまでか。
- 【3】「いかで、ことごとしきおぼえなく、いとらうたげなる人の、つつましきことなからむ、見つけてしがな」(245)。光源氏は、「ことごとしき」人々にはうんざりしていると見える。「見つけてしがな」とあるから、この段階で、まだ若紫の少女・紫上は見つかっていないことが予想される。この巻は、若紫巻より前から始まる。⇒【2】。もちろん、若紫の少女は、この光源氏の思念を充たす存在である。「故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御女、心細くて残りゐたる」という末摘花も、この段階では若紫の少女になりうる存在であったわけである。
- 【4】「さてもやおぼし寄るばかりのけはひあるあたりにこそは、一行をもほめかしたまふめるに、なびききこえずもて離れたるは、をさをさあるまじき」(245)は、交野少将と同じである。帯木冒頭に読者の意識を返す。交野少将より面白い話が源氏物語であったはず、というあの時点の読者の意識に、である。この巻は、そういう読者の期待にも応える巻であるということである。⇒帯木巻【2】。その意味では、この巻とて、帯木三帖と志を同じくする物語であると認められよう。光源氏の秘密にする、私的時間内の物語。
- 【5】空蟬と軒端萩への言及がある。しかし、「名残なきもの忘れをぞ、えしたま

はざりける」(246)というレベルで、この二人の決着はすでについている。

【6】大輔命婦は、光源氏の乳母「左衛門の乳母」の子。つまり、光源氏と乳兄妹。従って同年齢で、女・惟光といったところ。第一位の乳母「大式」に言及したところで明らかのように、彼女の登場もまた、夕顔巻を意識した設定である。

「いといたう色好める若人」とあるから、夕顔巻より面白い場面を光源氏に提供しそうな予感がする。なお、高級貴族になると、乳母も複数いることが、これで確認されよう。

【7】大輔命婦の父は「わかむどほり」(246)。皇族の血脈である。前巻の王命婦と同じく、光源氏にとって違和感のない人物である。夢浮橋巻に、薫が浮舟のことを横川僧都に「わかむどほり」だと説明している。これからすると、命婦の父は、出自の低い母親から生まれた皇族。おそらくは、常陸宮の弟であった可能性が強い。また、命婦の父は、一世代前、光源氏の母方の一族とともにあつた人なのではないかとも想像される。当然、末摘花の父・常陸宮もそういう人物であることが予想される。これは、源氏物語の始まる前の世界を考える場合、おさえておかなければならないポイントであろう。また、命婦の父は、「父の大輔の君は外にぞ住みける」(247)とあるところをみると、末摘花邸に当然住むべき人のようにみとれる。おそらくは、常陸宮の兄弟かと推測される。

【8】末摘花は常陸宮の晩年の子(246)で、愛娘。「古めかしうところせくかしづきすえたる」女。このこと、光源氏は承知している。源氏物語における扱いからみて、末摘花の年齢は、空蟬と同じくらいと考えられる。光源氏より、四五歳年上。葵上とほぼ同年齢かと推測される。

【9】「故常陸の親王」という言い方は、その死の記憶がまだなまなましい感覚である。ところで、故常陸宮は、系図のどの位置を占めた人なのであろうか。桐壺帝との関係は。話の具合からすると、桐壺帝とは別系統の人物のような感じがする。藤壺の父・先帝の血筋の人か。どうなのだろう。夕顔巻に顔を出している六条の高貴な人、つまり六条御息所との関係も気になるところである。

【10】大輔命婦の母もちょっと面白い。皇統の夫を捨てて、あるいは捨てられて、いまは筑前守の妻として任地に下っている。蓬生巻に顔を出す末摘花の叔母、あるいは源氏物語最後のヒロイン浮舟の母・中将みたいな人であろうか。常陸宮一族は、過去の栄華はともかく、現在は没落しているわけであるから、その没落の過程では、さまざまな世俗的悶着があつたものと推測される。大輔命婦の母の行為も、その一環かと思われる。これまでの例でいえば、空蟬が伊予介と結婚した事情と大同小異というべきか。なお、夫・大輔は、現在新しい女「継母」と同棲中である(247)。「いといたう色好める」大輔命婦の性格は、母と父との環境、血脈のせいかと想像される。

【11】末摘花の母も気にかかる。全く姿を見せぬところをみると、末摘花を産ん

で間もなく死んだのか。そうだとすると、常陸宮の晩年は、宇治八宮みたいであるが。

- 【12】末摘花の「心ばへ容貌など、深きかたはえ知りはべらず」(246～7)と命婦は言う。知ってる癖に平気で嘘をついている。食えない女である。
- 【13】「琴(きん)」をたしなむ女。北山の僧都からの連続性をここにみるべきではないか。少し前の時代、大陸文化に常陸宮の家庭も染まっていたものと推測される。琴は「ものの音がらの筋ことなるもの」(248)で大陸伝来の高貴な楽器である。光源氏は、末摘花の父・常陸宮が琴(きん)に造詣が深かったことを知っている。琴(きん)が象徴する世界も、おさえておく必要がある。
- 【14】「三つの友」(247)で、さりげなく『白氏文集』の世界を示す。この巻の重要な背景となる思想を、作者はじわりと提示する。これはその第一歩。
- 【15】光源氏が最初に常陸宮邸を訪れたのは、春。梅の花さく「十六夜の月」(247)の頃である。正月のことと推定される。夕顔巻の後、若紫巻の前に位置する時点であろうかと考えられる。
- 【16】琴(きん)の音色は、腕を隠す。「何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるもの」(248)。弾き手を選ばぬ楽器らしい。あるいは、常陸宮愛用の名器ゆえの妙なる音色であった可能性も強い。このあたり、宇津保の俊蔭巻みたいな設定である。さて、腕前の分かる前に命婦が止めさせたのは、憎い遣り方である。光源氏が、末摘花に興味を抱くよう巧みに誘導、演出している。彼女はなかなか「かどある」(249)女なのである。末摘花の実態については先刻承知の上でこうしているのだから、相当人が悪い。彼女は、この日でもって、この件は終了と考えていたものと推測される。が、光源氏の情熱に押し切られてしまう。という展開である。
- 【17】光源氏の印象。「かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれ」(248～9)。昔物語は俊蔭巻のことだろう。⇒【16】。源氏物語に則していえば、光源氏は今、まったく昔物語的な思い出・夕顔の夢の中にいるのである。⇒【1】。夕顔の死は、前の年の八月十六日だから、光源氏が「夕顔の夢よもう一度」の心境にあるのもいたしかたなかろう。
- 【18】「にはかにもわれも人もうちとけてかたらふべき人の際は、際とこそあれ」(249)から分かるように、光源氏は、末摘花をその他大勢の女とっていない。夕顔や空蟬とは違う。上流の重要な人物。敬意の対象となる人物と考えている。
- 【19】命婦の言葉「上の、まめにおはしますともてなやみきこえさせたまふ」(250)より判断して、桐壺帝にとって、光源氏と藤壺の一件はまだ思慮の外である。しかし、光源氏の秘密は、すでに周辺から崩れはじめている。夕顔の惟光。この巻の命婦、そして親友・頭中将(250～2)という具合に。「やつれたる御ありきは、軽々しき事も出できなむ」(252)という頭中将の忠告がそのうちいきてこ

よう。

[20] 命婦は、かなり「色めい」た女であったらしい(250)。紅葉賀巻の源典侍みたいな女だと思っておけばよいのかもしれぬ。こういう場数を踏んだ女が紹介した女、つまり末摘花に、期待が高まるのは、当然であろう。大輔命婦は、光源氏が心を許し、勝手が言える女性。女惟光。光源氏と乳兄妹。⇨【6】。

[21] 光源氏が頭中將に発見される条。頭中將も、しかし、末摘花の時、光源氏の秘密を発見したとて、なにになろう。夕顔の時、こうならなければならなかったのに。が、彼の存在も、この巻と夕顔巻とを結び付ける重要な小道具であることには変わらない。「かの撫子はえ尋ね知らぬを、おもき功に、御心のうちにおぼし出づ」(252)。この二人の絡みは、紅葉賀巻へと連絡してゆく。命婦・源典侍の取り合わせとともに、絶妙の展開だと思う。

[22] 「やつれたる御ありきは、軽々しき事も出で来なむ」(252)という頭中將の忠告。彼は、本質的に真面目な男であるようだ。常識を光源氏の前に示し、光源氏の行為の異常性を際立たせ、相対化している。この言葉、若紫巻をすでに読んでいた読者には、藤壺との一件が思い出されよう。善意の忠告が、心胆寒からしめる言葉となって響かぬか。

[23] この事件は、光源氏と頭中將の友情を深める作用をしている。秘密の共有が、二人の世界を確立してゆく。雨夜品定めからの連続である。

[24] 左大臣は、例によって光源氏の世話に夢中。高麗笛をふいている。この笛、横笛巻まで、響くか。

[25] 中務の君の挿話(252～3)は、葵上のあたりのハードな環境を示す意味あいがある。夕顔を震え上がらせた頭中將の家と矛盾しない。「絶えて見たてまつら所にかけて離れなむも」という文章よりして、中務は追放処分にもなりかねない状況であったとみえる。彼女は、光源氏への違いたさに、この環境に耐えようと決意しているらしい。なお、この中務、伊勢の娘と同じ名である。空蟬巻よりの心理的連続性が認められよう。

[26] 葵上の母「大宮」は、なかなか倫理観の強い性格の女性であるようである。

[27] 頭中將も、末摘花を夕顔の女性と仮想している(253)。彼は、雨夜品定めで夕顔を語って以来、忘れかけていた夕顔への思いを回復しているのである。雨夜品定めは去年の夏。秋に夕顔は死んでいる。このことは頭中將の知らぬことだ。

[28] 末摘花をめぐる光源氏と頭中將の競争。光源氏は負けたくない一心で、末摘花の世界に踏み込む。頭中將が絡んでこなければ、手紙をだしても返事もくれない女なんて相手にしなかったはずである。

[29] 「短き心はえつかわぬものを」(255)と光源氏は命婦に言う。いまは逸る心が言わせた言葉であっても、いつしか、この言葉に縛られる。「我はさりともし心

長う見果ててむ」(265)。

【30】「心のどこかにて、親はらからのもてあつかひ恨むるもなう、心やすからむ人は、なかなかむらうたかるべきを」(255)は、光源氏の葵上に対するあてこすりのように聞こえる。葵上が、光源氏の好き歩きを結果的に支えている構造であろう。末摘花は、葵上とは対極に位置する女。また、この言葉、これから出会うことになる北山少女・紫上への支持の表明でもある。もっとも末摘花とて、この段階では、夕顔や紫上になる可能性を十分に秘めていたのである。

【31】命婦は、末摘花が、光源氏の期待するような人ではないと明言している(255)。にもかかわらず、光源氏は勝手に都合よく曲解して「いと子めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」と思っている。彼は、いま平静ではない。要するに恋をしているのである。

【32】「瘡病にわずらひたまひ、人知れぬもの思ひのまぎれも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ。秋のころほひ」(255)のところに、若紫巻の大部分が含まれる。北山の少女発見、藤壺との逢瀬および懐妊という源氏物語の大事件がこの二行に籠められている。少女略奪の時にまではまだ到達していない。したがって末摘花巻の前半、つまり巻頭からここまでは、夕顔巻から若紫巻に至る空白をうめる物語だということが、ここで明らかになる。「並の巻」である。ということは、忘れられない夕顔の夢を追う心理状態で、末摘花は光源氏に眺められ期待されていたのである。「かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しうおほしいでらるる」(255)。夕顔の死からほぼ一年が経過していることが分かる。これから起こる末摘花へのほとんど絶望的失望は、したがって、こういう光源氏の、夕顔を求める熱に大量の水をかける作用をすることが予想されよう。作者の意図も、そこにあるものと思われる。

【33】大輔命婦としては、若紫巻の北山で供人がしたと同じように、珍奇な話の好きな光源氏のために、ちょっと末摘花を持ち出したにすぎない(256-7)。所詮、末摘花は座興の女。話だけにしておけばよかったのだ。しかし、タイミングが悪かった。忘れられない夕顔の夢を光源氏は勝手に追い掛け、頭中將の存在がそれを煽り、そしてこうなった。身から出た錆、光源氏の自業自得というものである。

【34】常陸宮は、その存命中からして、時代おくれの宮として、世の人も敬遠気味であつたらしい(257)。これは、大輔の命婦の認識である。彼女と光源氏とは同年であるから、光源氏もそう思っていて不思議はない。常陸宮の全盛時代は、光源氏が生まれる以前であつたと想像される。その後、常陸宮は世にとりのこされ、一時代前の流儀をかたくなに守って生きていたものと想像される。末摘花の頑固さは、親の代からのもので、いうなれば筋金入りである。

【35】命婦は、光源氏と末摘花との一件を父の兵部の大輔に言わなかった(258)。

本文の語気からすると、当然言えばよいのに、という感覚である。もし、言えば、北山僧都的な対応が、兵部の大輔にあったはずだ。ということか。

[36] 八月二十余日。光源氏が、大輔の命婦の手引きで常陸宮邸を訪れた。若紫巻の記事でいえば、北山少女の祖母が小康状態となり、北山から京都の自邸に帰ってきた時分に相当する。光源氏が常陸宮邸にしので末摘花の琴（きん）を聞いた日から、半年以上の時間が経過している。

[37] 大輔の命婦は思う。「わが常に責められたてまつる罪さりごとに、心苦しき人の御もの思ひやいでこむ」（260）。彼女は、自分の苦しみを末摘花に振ったのである。いかにも、軽薄で無責任な女。藤壺の王命婦とは好対照である。なお、末摘花が、普通の女性ではないことは、このあたりでもはや明らかである。知らぬは光源氏ばかりなり、といった風情。鳥獣物語の様相を呈しているといえは言い過ぎか。

[38] 「えびの香」（261）は末摘花の匂い。古代なる香りなのであろう。

[39] 末摘花の乳母子・侍従の存在。「はやりかなる若人」（261）とある。末摘花も、侍従と同年齢であるのだから、若人であることは間違いない。⇨【6】。

[40] 初回で光源氏は末摘花の異様性を見破っている。「心ゆかずなまいとほしとおぼゆる御さま」（262）。その肉体的特徴は暗闇をもともしなかったものと思われる。末摘花の異様性は、若紫巻の基調テーマ「忍ぶの乱れ限り知られず」の一環、駄目押しとして位置づけられよう。「並びの巻」の理由である。

[41] 頭中将の訪問記事（263～4）。夕顔巻とダブらせる小道具。⇨夕顔巻【72】。頭中将は、いつも肝心の情報に接近はするが、把握できない。損な役回りである。

[42] 「御粥強飯召して」（263）は、珍しい日常卑近な描写。「御粥」は釜で煮た飯（いひ）。固粥と呼ばれる現在のご飯と同じものか。「姫飯（ひめいひ）」とも呼ばれる。「強飯（こはいひ）」は、甑（こしき）で蒸した飯。現在の「おこわ」である。

[43] 「朱雀院の行幸」（263）。この頃最大の行事の接近を告げる記事が、若紫巻とこの巻を一括りにする。公と私。若紫も末摘花も、私的、個人的な世界の出来事にすぎない、という括りである。行幸は、十月に予定されている行事であった。あと一月少々しか間がない。⇨若紫巻【80】。

[44] 後朝の文は、早く来るほど愛情が深い。男の熱を計るバロメータでもある。末摘花の場合は、日暮れになっている。「待つほど過ぎ」（264）た返歌である。もっともいらいらしているのは命婦で、本人は何とも思っていないけれども。

[45] 末摘花の返歌は、侍従の教示によるものだが、直筆。「中さだの筋」（265）で、現代流行の書体、女房散らし書きではなかった。「上下ひとしく書い」（265）た漢文風の一昔前の書法である。これは、末摘花が、一昔前の空気を光源氏の許へ届けるという意味を含んでいるとみるべきであろう。前巻で、北山僧都が、

聖徳太子の百済伝来の品を光源氏に渡したと同じ発想で、これを捉えるべきではないかと私は思う。このあたりは、まだ何も知らぬ光源氏に、一昔前を意識させるための処置をほどこしている最中だと了解すると、源氏物語の秘密が仄かに見えてくると思わぬか。

【46】末摘花の返歌を見て光源氏が失望する。「かかることを悔しなどは言ふにやあらむ」(265)。雨夜品定め初め、頭中将に発した光源氏の疑問「そのかたかどもなき人はあらむや」(49)が思い出される。彼は今、その「かたかどもなき人」と向きあっているのである。

【47】光源氏が、心ゆかぬ末摘花に対して「心長う見果てむ」(265)と思うのは何故だろう。彼女の家柄故か。あるいは、極端なものは切れないという例か。などと一応考えられるかもしれない。が、しかし、ここも、一昔前の空気を大切にする必要があるという意識が光源氏の内部に芽生えてきているのだと捉え直すとなりがいこうというものだ。⇒【45】

【48】「かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける」(265)とあるのは当然である。光源氏は、二日目も、ましてや三日目も末摘花の所に行っていない。これでは結婚したことにならないではないか。

【49】左大臣家で、行幸の日に備えた音楽の練習。前巻で、小さな音であった行幸が、いよいよ大音響とともに接近してきた印象が強い。その音楽が、光源氏の公的生活であることを意識すると、ますます、この巻の私的な面が明確になる。帚木巻以来、われわれは、光源氏の私生活に付き合いすぎた感覚がそろそろしてくる頃である。紅葉賀巻は、待望久しい光源氏の晴舞台であるわけだ。

【50】「秋暮れ果てぬ」(266)よりすれば、光源氏は、八月二十余日以来一度も末摘花のところに行っていないらしい。一箇月以上の無沙汰である。これはいかにも酷い処置である。末摘花周辺が嘆くわけである。

【51】「行幸近くなりて、試楽などののしるころ」(266)は、紅葉賀巻の冒頭部分である。この巻は、若紫巻を飲み込むばかりか、紅葉賀巻をも侵す。重要な補完機能が持たされた巻であることが、ここで判明する。

【52】大輔の命婦は、末摘花のことを「心にくくもてなして止みなむ」と思っていた。光源氏の気を引けばよしとする程度のことであった。それなのに、光源氏が踏み込み、取り繕いようのない現実の悲哀をなめる結果となった。この点に関して、光源氏は大輔の命婦にすまぬと思っている。⇒【16】。

【53】大輔の命婦に恨み言を言われた時の光源氏の返事は、なかなか優しい。「もの思ひ知らぬやうなる心ざまを、こらさむと思ふぞかし」(266)。須磨・明石の後、久し振りに末摘花と対面した時の台詞も、こういう発想で言い訳をしている。⇒蓬生巻。しかし、光源氏の仕打ちは、末摘花の側に立ってみれば、到底許すことの出来ぬ失礼極まりない行為である。大輔の命婦が「泣きぬばかり」

(266)に思い、光源氏に訴えたのは、もっともな話である。

【54】大輔の命婦のたつての要請で、光源氏は行幸に忙殺されていた頃を過ごしてから末摘花の許を時々訪れている(266~7)。末摘花の風貌に接するのは、したがって、二回目の訪問ではない。暗闇のなかで、かなり想像した果ての結果である。「手さぐりのたどたどしきに、あやしう心得ぬこともあるにや、見てしがな」(267)。

【55】「かの紫のゆかり尋ねとりたまひては、そのうつくしみに心入りたまひて」(267)とある。若紫の少女略奪は、光源氏が末摘花に出会った後である。もし、末摘花が夕顔のような女性であったとしたら、若紫略奪はありえなかったのではあるまいか。その意味では、ものぐるおしい前巻の、そのものぐるおしさの理由づけに、この巻のこの事件が手を貸しているともいえよう。若紫巻の補強工作、裏打ちの意味合いを末摘花巻は持っている。⇨【40】。

【56】「六条わたりだに離れまさりたまふれば」とある。六条御息所によって末摘花が相対化されていることが分かる。若紫少女、六条御息所、末摘花の順に光源氏に関心度は薄らいでいるのが現状である。

【57】この日、光源氏は末摘花を見ようと思って訪問している。宵に格子の隙間から見ようとして果たせず、朝の露頭となったわけである。

【58】末摘花邸の調度。「御台、秘色やうの唐土のもの」(268)が見える。大陸文化人の栄華の名残である。女房たちの装束、髪形など、一昔前の風俗をひきずっている浮世離れた所であったらしい。「内教坊、内侍所のほどに、かかる者どものあるはや」(268)というのが光源氏の感想である。

【59】「秘色(ひそく)」であるが、これは青磁の土器で、唐代にはあったが、しばらくは幻の磁器で、破片すら珍重された稀なものであった。宋の時代にいたって、ようやく復活生産されるようになったもの。なお、わが国で生産されるのは、江戸時代の前期からということになる。その秘色が、破片ではなく完品として、さりげなく末摘花邸にある。というところが驚異である。これは、後に出てくる「古代のゆゑづきたる御装束」黒貂の皮衣の、軽い露払い、予兆ということろであろう。

【60】光源氏が覗き見た末摘花のところにいる「御達」の様子は、夕顔宿で経験した隣の人々の声のようで、「あやしうひなびたる限り」(269)の日常卑近な感覚にみちたものである。意識的な操作であろう。諷諭詩感覚の醸成である。上流階級の夕顔。

【61】この日、侍従はいない。彼女は「齋院に参り通ふ」人であった。末摘花のところだけでは食えなかったのだと考えられる。さて、利発な彼女が側にいないとなると、末摘花は、生々しく光源氏に接するほかないわけである。

【62】末摘花邸は「なにかし院」のような雰囲気(269)。が、某院より手狭である

と光源氏は感じたと書いてある。もって某院の巨大さを想像すべきである。全盛時代には誰が使用したものか。このあたりで、かの院を、光源氏一族の巨大な過去の遺構と考えるべきではないか。若き日の明石入道とその父大臣、北山僧都と妹尼も俗形。光源氏の祖父は大納言、六条御息所の夫は東宮である。そこに常陸宮もいる。そういう群像たちの夢の舞台であったのではないだろうか。⇒夕顔巻【53】。

【63】雪の翌朝、光源氏の側に出よう勤める老女房の言葉を見よ。「心うつくしきこそ」(270)。女は素直なのが一番。彼女たちは、末摘花の風貌をとくに承知しているのである。

【64】末摘花の風貌の醜悪さ。その想像を絶した物凄さが、光源氏および読者の中にある夕顔の夢を吹き飛ばしてしまう。この巻を描いた目的。また、光源氏が、その美しさを男君達をそうするように、末摘花はその醜さで源氏物語に登場する全ての女達を相対化してしまう。

【65】最初に光源氏の視野に飛び込んできたもの。「居丈の高う、を背長」な姿。この時、光源氏は「さればよ」と思っているから、この点は暗闇のなかで確認ずみの事柄であったものと知れよう。

【66】『呂氏春秋』孝行覽・遇合に敦洽讎藥(とんこうしゅうび)という醜男が出てくる。敦洽を女とする説もある。「おでこで、顔がひらべったく、顔お色は赤漆。眼は鼻まで垂れ下がり、肘が長くて、がに股」。彼(彼女)は確かに醜いが、徳のある人であつたらしい。末摘花の特徴「心うつくし」(270)に見合う。また、黄帝の妻に「嫫母」という醜女がいた。彼女も徳のある人であつたという。これらを意識して書いたか。本朝で言えば『今昔物語』や『宇治拾遺物語』に登場する「青常」が、末摘花に充分対抗しうる素材である。青常の特徴を述べれば。サイズチ頭、隈どられた深目、出っ歯、ハイソプラノの声、モンローウォーク、瘦身、青白い顔色、高く赤い鼻、古宮の子。こう見てくると、青常も負けていないことが分かる。青常はもちろん綽名であつて、正しくは源邦正。醍醐天皇の親王・重明の子、「わかんどほり」である。『江家次第』によれば、重明親王は、黒貂裘を八枚も重ねて着ていたという伝説をもつ人である。だから、この家系は無視できない。なお、歌人として有名な斎宮女御・徽子女王は、青常・邦正の妹である。

【67】彼女の、像のように長くて垂れている鼻を「普賢菩薩の乗物」(270)と表現したのは何故か。『法華經』卷第八「普賢菩薩觀發品」第二十八によれば、普賢菩薩は東方より登場してくる。ということは、普賢菩薩は東方にいます菩薩ということになる。東方⇒常陸宮⇒末摘花、という連想が、「六牙白象王」に乗った普賢菩薩を将来したと考えるべきか。なお、『西陽雜俎』卷四「境異」に東方の人は鼻が大きいという記事がある。東方⇒鼻という連想も考えられる。日本

古代神話でいえば、天孫降臨の時「天のやちまた」で待っていた猿田彦がいる。彼の鼻は「七咫」と『日本書紀』にある。胴長という点も共通している。痩せさらばえた印象は、清涼殿の丑寅の方角にあった衝立に描かれた手長足長図に因っているのではないか。また、高い鼻、胴長は異人を連想する。これは、末摘花世界の持つ大陸臭さの、自然な帰結というべきか。あるいは、源氏物語初期の神仙的発想からして、異界の人という考えも魅力的だ。

【68】髪的美しさの強調も、彼女の救いというのではなく、醜さのとどめを刺す意味ではないか。美しいものは、醜いものによって、もっと美しくなる。が、醜いものは、美しいものをバックにもつことによって、ますます醜くなる。末摘花は、いくなれば、絶望的バックシャンなのである。

【69】末摘花が上着として着用していた「黒貂の皮衣」(271)は、常陸宮の栄華の名残を示すものであろう。大陸文化全盛時代の残滓。これは北山僧都に同じだ。中国古代において「黒貂の裘」は、「明月の珠」「和氏の璧」と並ぶ貴重品であった。⇒『戦国策』第十八。王昭君が嫁いだ匈奴、單于の国の王が着ていた衣である。⇒黄魯直「塞上曲」。『論語』擁也篇にある「肥馬輕裘」の「裘」。神亀四年初めて来朝した渤海国王は、貂の皮を三百張朝貢している。⇒『続日本紀』神亀五年(728)正月十七日。なお、『日本紀略』によれば、仁和元年(885)正月十七日、参議以下のものが黒貂の皮衣を着用することが禁止されている。とにもかくにも、若い女の装束としては、異様すぎる。「されど、げにこの皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざま」(271)という作者の筆法は、痛烈である。紫式部も相当に口が悪い。なお、『史記』によれば、皮服は禹の時代から鳥夷(東北地方)の特産品。もっとも、実態は猪の皮であつたらしいけれども。⇒夏本紀第二。

【70】光源氏の言葉に、恥ずかしそうに「口おほひ」している末摘花を「ひなびふるめかしう、ことごとし」と評したうえで、「儀式官の練り出でたる臂もち」を連想している。先に、女房をみて、内教坊や内侍所の女官を思ったのと同工異曲である。⇒【56】。

【71】光源氏の歌に返事が出来ず「むむ」と笑う末摘花(272)。笑いのダメ押しであるが、ここまでくるとものぐるおしい。彼女の人格、常陸宮家の名誉はどうなるのか。という読者の心理をテコにして、以後の、末摘花救援の展開が可能になるということか。

【72】「かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし」(272~3)。状況設定は、全く以て雨夜品定め議論通りなのである。しかし、あれはあくまで話の上の話であって、現実はいかかまでおぞましく厳しい。ここに「心苦しくらうたげならむ人」を据えて、「うしろめたう恋しと思はばや」という夕顔の夢は、あっけなく砕け散る。と同時に、「あるまじき」藤壺への「もの思ひ」を、

それでまぎらわせようという光源氏の甘い思念が厳しく拒否されたというべきである。つまり、光源氏は、末摘花によって、ぬきさしならぬ現実へと押し戻されるのだ。その現実とは、音楽の賑やかな朱雀院の行幸、光源氏の子供が藤壺の腹の中で日ごとに大きくなっているという現実である。

【73】末摘花の許に通うようになったのは、亡き常陸宮の「魂のしるべなめり」と光源氏は思う。これは、失敗の合理化であるが、もうすこし大きな手を考える必要があるのではないか。失われた一族復興へと光源氏を導く、見えない手を感じとる必要があろうと私は考える。⇒【62】。昔懐かしい「橘の木のうちもれたる、御隨身召して払はせたまふ」(273)は、その象徴的行為ではないか。

【74】常陸宮を辞する場面(272~4)。貧しい門番とその娘。「はしたなる大きさの女」とあるから、この娘も末摘花同様の巨女らしい。さて、この場面はいかにも『白氏文集』諷諭詩に似た場面である。というより、「わかき者はかたちかくれず」(274)とわざわざ諷諭詩の一節を光源氏に朗詠させるという作為の場面の設定には、深い寓意がこめられているのではないか。諷諭詩。この詩群のテーマは何か。社会的弱者を描出紹介することによって、社会的強者・皇帝に彼らの救援を訴える。白楽天のいう「兼濟思想」である。光源氏による末摘花救援には、諷諭詩のテーマ「兼濟」による補強工作が施されていると考えるべきではないか。白楽天の諷諭詩のなかに「馴犀」という詩がある。象が生きて犀が死ぬ、という詩である。⇒『白氏文集』巻三。象のイメージがある末摘花のこれからを暗示していると読むのは深読みだろうか。

【75】「世の常なるほどの、異なることなさならば、思ひ捨てても止みぬべきを」(274)とある。この伝でいけば、末摘花が光源氏の世界に残ることができたのは、その圧倒的な異常性の故であったということになる。「世の常ならざる世界」ならば、光源氏とて同じ世界の人なのであるから。

【76】空蟬がちらっと出てくる(274)。彼女は、夕顔でだいぶワリをくったけれども、彼女より醜く、浮世離れた末摘花の出現によって名誉を回復している。以後よく一対のものとして描かれる。そう描かれるには、それなりの理由があるのではないと思われる。顔はともかく「心うつくしき」愚直な女。

【77】大輔の命婦が、「内裏の宿直所」桐壺で、光源氏の整髪をする珍しい場面がある。命婦クラスの侍女にはこういう役目もあったのである。

【78】年末、末摘花が光源氏へ正月用の晴れ着「艶なう古めきたる直衣」を贈る場面(275~8)。女の家が男の世話をする当時の風習からみて、これは全く正しいやりかたである。が、状況判断などものかわ、妻としての務めを果たして疑うことのないところ、鬼気迫るものがある。かくて、末摘花は、常陸宮生前の空気を光源氏の前に吹き込む。彼女の役割は、それだけでもよかったのではないか。

- [79] 末摘花の歌。「唐衣君が心のつらければ袂はかくぞそほちつつのみ」(276)。末摘花自作第一歌である。末摘花の「唐衣」へのこだわり。この含意をとくと理解すべき時である。光源氏と読者はそろって、末摘花のワンパターンを、以後笑い続けるだろうけれども。
- [80] 光源氏の手習。「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花に袖を触れけむ」。巻名となった歌である。これが光源氏の本音。悔恨の歌だが、末摘花にとってはやるせない歌だろう。
- [81] 大輔の命婦は、末摘花の鼻についておよそ知っている(277)。知っていながら、紹介したのだから、悪い女である。光源氏から一本とってやろうと悪戯っぽく思ったのかもしれない。それほど、光源氏とは親しい女である。女・惟光。しかし、末摘花の実体は、彼女の想像をも超えていたらしい。「何に御覽ぜさせつらむ、我さへ心なきやうに」(278)と末摘花からの贈り物を光源氏に見せたことを後悔している。後悔は、しかし、正月の装束のことばかりではなからう。末摘花を見せたこと自体を真っ直ぐに指していると思わぬか。
- [82] 大輔命婦の懇願歌「紅のひと花衣うすくともひたすら朽たす名をし立てずは」を受けて、「人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり」(278)と思う光源氏。誰も問題にしなくなっている宮家のプライドを認める。彼でなければ、出来ない優しさである。
- [83] 「肥後の采女」は赤鼻の女であったことが確認される(279)。奈良時代の花形、采女も、平安時代中盤になると形無しである。
- [84] 光源氏からのお返し of 衣料と歌を見ても、末摘花とその周辺の女たちは、自分たちのやったことに対する反省の色がない。あまつさえ、衣料と歌をけなしてさえている(279)。彼女たちの頑迷固陋さ、尋常の沙汰ではない。よほど常陸宮の過去に自信があるのである。
- [85] 末摘花は、光源氏に与えた歌のメモを手元に保管している。会心の作であったからである。かわいいではないか。
- [86] 「今年男踏歌あるべければ」(279)とある。初音巻にも、男踏歌の記事がある。珍しい正月行事であったためか。
- [87] 正月七日の夜、光源氏が末摘花の許に行く。衣装は、光源氏が与えたものを着ているので、改まっている。本人の声、言葉もはじめて聞いた。「さへづる春は」。末摘花は古今集を知っていた。「年経ぬるしるし」である。年とともにもの皆改まる。だが、鼻は改まることなく依然として赤い。誠にかわいそうな展開である。しかし、依然たるものは鼻だけであろうか。末摘花の鼻は、彼女がひきざっている一昔前の、古代なる世界の象徴であろう。
- [88] 終章の二条院の場面。こちらの少女は、齒黒めも化粧もし、一段と「うつくしうきよら」になっている。「古代の祖母君の御なごり」(282)からの脱出で

ある。末摘花との対照が考慮されていることが分かって。少女と鼻を赤くして遊ぶ光源氏の姿の点出は、末摘花の世界の密閉である。もうこりごりだ、という光源氏の心理を読者も笑いながら共有する。ここに、夕顔の夢を追う道は閉ざされ、若紫の少女の未来につづくはてしない夢が広がる。忘れられない夕顔は、かくして、いつのまにか少女のなかに溶け込んでゆき、読者の脳裏から忘れられてゆく。光源氏とて同じである。その意味では、末摘花巻は、源氏物語を正規の軌道、つまり母なる路線に乗せるための補助修整装置だともいえよう。

【89】なお、若紫巻によれば、藤壺の懐妊は夏であった。が、彼女は春だと断然世を欺く必要があった。だとすれば、この頃は、藤壺が運命の子を生まねばならない頃であったわけで、藤壺の周辺の騒動は相当のものであったに違いない。世は、とんでもない事件が進行成就しつつあったわけだから、この末摘花騒動は、その、本編の騒動の強い暗示効果があるという読みは、決定的に重要なのではないか、と私は思う。つまり、藤壺の罪の重大さと、末摘花の醜悪の度合いとは、釣り合っていると考えるべき時ではないか。

【90】この巻は、梅の咲く頃に始まり、梅の咲く頃に終わっている。ほぼ一年の描写なのだが、かなり長い印象がある。さまざまな物語の裏打ちをしているからだろう。

【91】「かかる人々の末々、いかなりけむ」(283)という終わり方は、これで、光源氏の、隠したがっていたプライベートなお話の暴露はお終いにします、という宣言になっている。帚木巻に始まり末摘花巻に終わる長いトンネルを抜け、次の巻から、いよいよ光源氏本来の、赫々としているがとんでもない晴舞台が展開されるわけである。

(注) 本文は新潮古典集成『源氏物語 一』に依っている。括弧内数字は、その所在ページを表示している。

